

る環境で利用しようとする際には、極めて制約の多い手段である（自然科学分野でも事情は変わらない）。用いた文字がなければワープロの外字機能などを用いて自らその文字を作成することになり、必然的にテキスト形式のデータには反映されないものとなるのである。インターネットをはじめ各種パソコン通信網は着実に研究者の間にも浸透している。そうした場において、コンピュータの性能向上や価格の低下に伴う一般への普及を背景として、テキスト形式のデータでは賄いきれない部分を担っているのが画像データである。しかし、画像と文字とではやはり意味や用途が異なっており、必ずしも一方が他方の代用になるといった類のものではない。

名古屋大学史編集室に保存されている資（史）料は、名古屋大学史資料室に引き継がれることとなっている。資料室は、情報化社会と呼ばれるこの時代において何をなすべきなのであろうか。コンピュータの活用という意味では、この先数年間は実質的な意味において過渡期の瀬にあたると思われるのであるが、大いなる宿題である。

（名古屋大学史編集室助手）

## 名古屋大学史編集室に入って

編集室事務員 水野 小百合

編集室の事務員三代目として勤務し三年が経ちました。『名古屋大学五十年史 通史』も無事完成し、嬉しく思っています。

編集室へ入った頃は民間企業からの転職ということもあり、学校特有の雰囲気になじめず悩んだこともありまし

たが、今ではすっかり溶け込んでしまいました。

事務の仕事は本の整理、資料のコピー、事務関係の書類の処理、お茶だし等々で、特に本の整理と、資料のコピーは大変でした。何が大変かと言うと、まず本の整理ですが、これは編集室で購入したり、他大学、他機関より寄贈されたものをコンピューター入力するのですが、普段使う漢字とかならないのですが、本の題名とかで、古本屋さん等で購入した本など、普段使わない漢字とかで書かれている物は、はつきり言って読めません。編集室へ来てからは、漢和辞典・国語辞典を片手に悪戦苦闘し、この世の中にはなんて読めない字が多いのだろうと悲しくなる時もありました。入力変換するためには、正しい読みを入れなくてはならず、ひたすら色々な読み方を考える毎日でした。しかも、途中で機械が変わり今までであったものから新しい機械への読み込みができず、何千冊もある本、資料を一から入れなおさなくてはならず、途方に暮れる毎日です。資料のコピーは、新しいものや、本であればいいのですが、何十年も前のものとか、触るだけでボロボロになりそうなものは本当にたいへんでした。コピーしているあいだに修復不可能になってしまうのではないかと、ドキドキでした。当時の物は、後々コピーされるなんて思ってもいないようで、どうやっても中身が見れない物や、二つ折りにしてあるものでも印刷面を中に折り込んで綴じてある物など様々な物がありました。この様なタイプは嫌でも解体して、一枚づつコピーしなくてはならず、一冊コピーするのに解体で一時間、コピーで一時間、修復で一時間なんて事も多々ありました。これはもう「忍耐あるのみ」の世界で、全く忍耐力の無い私も少しだけ忍耐力が付いたような気がします。そんな私も、この三月で任期満了に伴い編集室を去ることとなります。いま思えば、こんな我が儘な事務員に耐え忍んでくださった先生方が、一番忍耐力が付いたのではないかと思います。本当にありがとうございます。

『名古屋大学五十年史 通史』という、偉大な歴史の本の片隅に名前を載せていただけたことは私にとって、こ

れほど名誉なことはありません。編集室へ入って本当によかったと思います。四月からは、資料室として新しいスタートを切るわけですが、これからも明るく、楽しい職場で頑張ってください。

## 『名古屋大学五十年史 通史一・二』と私

(財)名古屋大学出版会 木和田 志 乃

『写真集 名古屋大学の歴史』が刊行された頃、私は名古屋大学出版会に就職することが決まり、大学史の完結編『通史』を担当することになりました。それからもう四年。早いものです。

『通史』は一八〇〇ページ程ありますが、これだけページ数の多いものを担当するのは初めてでした。が、体裁なども八九年刊行の『部局史』とほぼ同じものにすればいいですし、また、入稿が遅れていたのは気になりましたが、かなり完成度の高い原稿がいただけるに違いない、と勝手に考え、当初、私は刊行までのスケジュール、作業の見通しを随分と楽観的に考えていました。

ところが組上がった校正を初めて大学史編集室に持っていったところから様子が変わってきました。まず、しきりに「校正を戻すのはいつまで待てるか」と尋ねてこられるようになりました。しかし「何日までに」と締切りを設定しても、全然戻ってはきません。ようやく返ってきたゲラは、どのページもどのページも真っ赤になり、あるいは差し替えや追加のための原稿がベタベタと貼り付けてあるありさまでした。ある時は「よりよい通史を作るため」と言い聞かせ、仕方がないなあため息をつきながら、ある時はどういう順序で読んだらいいのか分からない、誤